

『食といのちの学び』は、
何故、酪農教育ファーム活動で
可能となるのだろうか？！

2010年8月6日

社団法人 **中央酪農会議**

事務局長 前田 浩史

1. 「酪農教育ファーム」における体験学習活動の広がり

- 1998年（平成10年）7月 酪農教育ファーム推進委員会設立
- 2001年（平成13年）1月 酪農教育ファーム認証制度創設
- 2005年度（平成17年度） 酪農教育ファーム地域推進委員会設置
- 2008年度（平成20年度）新たな酪農教育ファーム認証制度がスタート



	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
上期	162,484	254,542	調査なし	421,855	456,662	473,220	662,629
下期	63,392	89,600 ◯		133,265	234,045	232,348	214,543 ◯
年間	225,876	344,142		555,140	690,707	705,568	877,172
前年比	-	152.4%		-	124.4%	102.2%	124.3%
15年度比	-	152.4%		245.8%	305.8%	312.4%	388.3%

注: ◯は推定値、◎は速報値

2. 『体験学習の場としての「牧場」の可能性』を考える。

(1) 酪農教育ファーム活動の研究的課題

最初に何が起こったのか？～酪農教育ファーム活動の「始め」の形～

酪農家サイドでは：

牧場での様々な体験が「子ども達に好ましい変化（愛情を自己表現し、他者の愛情を素直に受け入れられるようになる。生きることへのモチベーションを取り戻すなど。）をもたらす」ことが、過去からの酪農家の活動（不登校の子ども達を牧場で預かる活動など）のなかで、経験的に語られていた。

教師サイドでは：

動機や手法は様々であったが、少なくない教師達が、酪農場を活用した自発的な教育活動（多くは、遠足や写生の場として訪問する機会が多かったが）を試み、予想を超えた手ごたえ（学校では見られない子ども達の変化や個性の発揚、学習へのモチベーションの高揚など）を直感的に感じていた。

酪農教育ファーム活動は、こうした酪農家と教師の、牧場での体験活動に対する「経験的直感的」な評価が一致したところからスタートしている。

さらに重要なことは、牧場を舞台にしたこうした活動の教育的効用（以下、「酪農の教育力」と呼ぶ。）を、酪農家や教師たちが、個人的な活動に止めることなく、「他に広く還元し社会全体で共有化したい」と考えたことである。その社会性や前向きな態度こそが、酪農教育ファーム活動の推進力となった。

酪農教育ファーム活動発展のための研究的課題

酪農教育ファーム活動を、「教育的かつ社会的（他に広げ社会に還元し共有化する）」運動として発展させるためには、関係者が「経験的直感的」に感じてきた「酪農の教育力」を、体系化された論理的概念として整理しなければならない。これなしには、「酪農の教育力」は市民権を獲得できず、学校教育（社会的な教育システム）との連携、教育現場における実践的な普及は困難である。

また、「酪農の教育力」が体系的、論理的に整理されて始めて、教育活動の個別の実践の中に具体的に位置付けることが可能となり、またそれにより、酪農教育ファーム活動のもつ教育的効果の効率的な発現が可能となる。

こうしたことから、酪農教育ファーム活動の研究的課題は、何故、牧場空間での体験学習活動が教育的効果を発現するのか、すなわち、「酪農教育ファーム活動の教育的可能性は、酪農という生産活動や牧場の要素のどこから生まれるのか？」という点を、実践者の共同研究、経験交流によって、具体的な形で明らかにすることである。

【参考】本年度のモデル研究（計画）

	検証する教育効果	調査対象	活動タイプ	主な研究者
	児童の食生活に係る意識や行動の及ぼす効果（社会科学習と関連付けて）	小学校5年生	牧場での体験	早稲田大学大学院教職研究科 田中博之教授
	児童の牛乳飲用行動に及ぼす効果	小学生	出前型体験 牧場での体験	ネクストネットワーク 辻中俊樹氏
	児童の「いのち観」や「心の成長」に及ぼす効果	適応障害児 (小5～中3)	牧場での体験	広島大学大学院教育学研究科 鈴木由美子教授
	子どもの食生活に係る意識や行動に及ぼす効果（家族内のコミュニケーションを通して）	家族及び小学生	牧場での体験	法政大学経営学部 木村純子教授

(2) 酪農教育ファーム活動の教育的可能性を考えるための視点。(試論)

「体験学習」としての酪農教育ファーム活動

体験学習の特徴と意義

「体験」とは、諸感覚（五感）を通して「物事を経験的に感じたり考えたりする」ことであり、そこで得られるのは「イメージ」的な「概念」である。

新たな体験によって、過去の体験から得られた「イメージ」が再構成され、新しい「イメージ」に変化する。このようにイメージ的概念が体験を通して変化し成長する特性（これを「想像の創造的性格」(ヴィゴツキー)とも呼ぶ。)を活用した学習方法が「体験学習」と言える。

注：イメージが変化し成長する方向性は、より空想的となる場合、知識や他者の経験と結びついて体系化され規範的となる場合がある。（これは子どもの成長過程により異なることから、年齢によって体験学習の方法は異なる。）

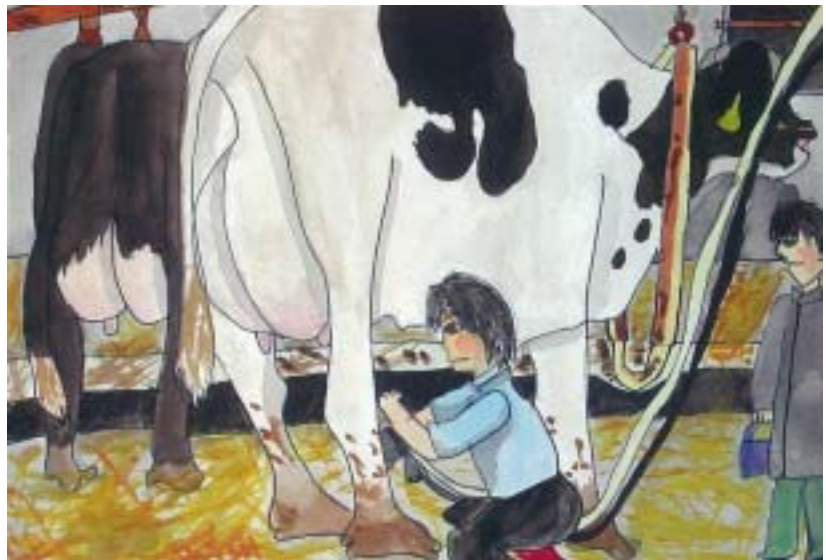


酪農体験後の絵
(小学校1年生)

自分と牛(乳房・搾乳)の「極私的関係」が空想的なイメージとして表現されている。

酪農体験後の絵
(小学校6年生)

体験全体の様々な要素が体系的に表現されている。
自分や友達、牛の関係が客観的に観察されている。



「体験」で得られるイメージ的概念を「生活的体験的概念」とも呼び、これに対し、知識や理論と結び付けて「体系的なものにした概念」を「科学的体系的概念」とも呼べる。

「科学的体系的概念」の習得が、近代の学校教育の目的であった。

(生活的体験的概念と科学的体系的概念を対立的に捉える傾向があったが、近年においては、この二つの概念が依存し合うものとして捉えられるようになり、体験学習の評価が高まっている。)

「生活的体験的概念」を「科学的体系的概念(=狭義な意味での学び)」に転換させ発展させる学習過程全体を、広義の「体験学習」と呼ぶこともできる。

「豊かな体験」は学びのモチベーションを強める。

体験前と体験後のイメージ的概念のギャップが大きければ大きいほど、子ども達の気づきや発見（驚きや疑問）も大きい。これが、次の学習へのモチベーションを強くし学習効果を大きくする。したがって、この体験前と体験後の概念ギャップが大きいほど、その体験は「豊か」であると言える。

「豊かな体験」(リアルな体験)が準備されていれば、「バーチャルな学習(体験)」が逆に、学習効果(比較して学ぶ)を生み出す。(角屋先生)

すなわち、「体験学習」の場として、より相応しい環境は、「豊かさ」の源泉となるイメージ的概念のより大きなギャップを産み出す条件が、その体験のフィールドにあるかどうかということである。こうした視点から「牧場」を検証することが必要。

「協同学習」としての酪農教育ファーム活動。

酪農教育ファーム活動の多くが「協同学習」である。

実際に実施されている酪農教育ファーム活動の多くは、小学校のクラス単位やスポーツクラブ、家族などの集団的な体験の場合がほとんどであり、「協同学習」も酪農教育ファーム活動の一つの特徴となっている。

「協同学習」の重要な特徴は、学習者(子ども達)同士で、共通する体験(課題)をめぐるコミュニケーションが生じることである。

コミュニケーションは「体験の共有」によって成立する。

人々が集まることによって、自然発生的にコミュニケーションが成立するのではない。コミュニケーションは、人々が同じ体験(課題)を共有することによって成立する。同じクラスの子供達の間で、家族の間で、「確かな」コミュニケーションが成立するためには、まさに「同じ体験」を「豊か」な形で共有することが重要。

コミュニケーション活動としての協同学習の意義

人々は、同様な生活上の課題を共有する身近な人々との間でのコミュニケーションを通じて、自らの価値観や意識、態度、行動を変化させる。これが、コミュニケーションの社会的意義である。

同じ体験で得られるイメージ的概念は、個人(価値観や知識、過去の経験)によって異なる。コミュニケーションは、こうした他者のイメージ的概念とのギャップ(を比較して)を埋めようとする行為である。こうしたコミュニケーション上におけるプロセスが、学び(変化や成長)のドライバーともなる。

こうしたことから、協同学習の効果を強めるためには、体験を通して、子ども達が獲得したそれぞれのイメージ的概念を「表現する場」が設定されることである。

(3) 「酪農体験」における学びの可能性とそのユニークな背景

牧場の「非日常性」

子ども達の生活は「消費生活」であり、自分の日常に「生産する行為」はない。特に、「牛乳の消費」は子ども達にとって極めて日常的行為。それゆえに、それぞれの子ども達は「牛乳」に係るそれぞれの『イメージ的概念』を確実に有している。

さらに、幸か不幸か、他の農業（稲作や蔬菜園芸などの「伝統的農業」）と異なり、酪農は、学校の教科の中ではほとんど学習のテーマとして取り扱われて来なかった。このため、子ども達の「牛乳 牧場」に対する概念には連続性がなく、そのイメージは、「バーチャル」な場合が多い。

それ故に、牧場でのリアルな体験で得られる「イメージ的概念」とのギャップ（バーチャルとリアルのイメージギャップ）も大きく、それ故に、牛乳を生産する場としての牧場での体験は、大いに学びを動機付け易くなる。

牧場の「多様性」～三つの「いのち=LIFE」が学びのスイッチになる～

「いのちと共生」する「牧場の生活」

牧場の生活は、乳牛を始めとする様々な「いのちのリズム」に寄り添うことで成り立っている。

例えば、主要な生産物である生乳を効率的に生産しそれを生業にするためには、「乳牛を如何に健康な状態で飼うか」が基本となる。牧場の人々は、乳牛の泌乳や繁殖の生理にあわせて、日常の自らの生活を（毎日、四季を通して、酪農家である間＝一生）マネジメントしなければならない。

こうした酪農生産の持つ技術的な特性が、酪農家の人間形成と強く関連している。他者のリズムに合わせる力がない人は、酪農の仕事には就けない。酪農家が「強い他者意識と寛容力」持っているといわれる背景でもある。

乳牛以外でも、堆肥や貯蔵飼料（サイレージ）の生産は、微生物との共生により可能となる。飼料（乾草やトモろこし）生産は、季節や天候に合わせなければならない。

このように、酪農家（酪農の仕事）は自然（いのち）との共生により成り立っている。

「生きることの現実」としての「酪農家の人生」

酪農は、農業の中でも、3K（きつい、危険、きたない）職種の代表とも言われて

きた。にも拘らず、酪農という職業を「人生をかけた仕事」として選択したのが酪農家である。

ここでテーマとなるのが、「生きることの価値」「人生の価値」をどのようなものに見出すかという問題、すなわち「生きる」ことそのものである。

全ての酪農家は、その生きてきた歴史のなかで、多くの失敗と苦勞を味わってきた。そして、これを「努力や工夫、勇気と決断」で乗り越えてきた。そこにあるのが、酪農家の「価値観 = 目標や夢」であり、それへの「こだわり」である。

そうした酪農家の生き様に「頼もしさ」や「生きることの喜びや楽しさ」を感じ、「本物の大人」を見出すことができる。

また重要なことは、牧場の仕事が「家族の協同」によって成り立っているということである。多くの牧場が家族経営であるのは、牧場生産の要素が雇用労働による企業経営になじみにくいことにより、このことも酪農の「宿命」である。したがって、酪農家の目標や夢は、家族の絆によって実現される。

さらに、酪農が「地域との関係性」のなかで成立する要素が強いことである。その基本は、すぐに腐ってしまう「生乳」を集団で出荷・販売することが効率的であるという生乳の商品特性と関連している。すなわち、酪農家は「地域の仲間達と共同」で市場と対抗している。さらに、専業農家の少ない日本の農村地帯での人的役割、堆肥を地域の耕種農家に供給する地域農業における物質循環のコア機能など、「地域との絆」が酪農にとって重要な要素となっている。

「食に連続」する「乳牛のいのち」

酪農場において大きな教育的要素は「乳牛」と言われている。

旧約聖書以来、「乳」は「蜂蜜」とともに「神の食べ物」と呼ばれてきた。その特徴は、「いのちを奪わず」に人間が手に入れられる数少ない食べ物であるということである。

すなわち、本来は子牛を育てるための母牛の乳を人間が横から搾取（動詞としての milk の意味）する生産活動が酪農である。

哺乳類の乳腺細胞（母親の血液から子どもの成長に必要なもののみを選択して乳を作り出す）は、胎盤とほぼ同様の機能を持つ。すなわち、M I L K は、母親から子どもへのいのちの連続性そのものである。その連続性に人間が入り込んだのが酪農生産である。

さらに、反芻動物である牛は、自らでは消化できない草などを、第一胃内の微生物により消化させ、その微生物を栄養としている。牛は「もう一つの牧場」を体のなかに持っているといわれる所以である。

草 微生物 母牛 乳 子牛・人間といった「いのちの連続性」が酪農生産の特徴である。

3. 「食といのちの学び」の定義

食の学び：日頃身近に接し食べている牛乳乳製品の原料である生乳等の生産の仕組みやプロセス、これを生産している酪農家の想いや工夫を学ぶことを通して、食への理解を深める。また、乳牛のいのちの一部を貰っていることなどへ感謝したり、酪農家の労働を尊敬したり、食文化を尊重したりする気持ちを抱かせること。

いのちの学び：牧場にいる乳牛などの生き物との触れ合いにより、いのちを身近に感じるようにする。また、人と乳牛などの家畜が共存する生産のあり方や牧場を取り巻く環境を学ぶことを通して、人と他の生き物との関係性やいのちを育むことへの理解を深めるとともに、いのちを尊重する態度を育てること。

4. 分科会で議論して欲しいこと。

